

夏秋イチゴにおける炭疽病の発生と防除対策

栃木県農業試験場 こばやし まこと たかの じゅんいち
 小林 誠・高野 純一

はじめに

栃木県は促成イチゴの大産地であり、その生産量、販売金額ともに全国1位を誇る。現在は、県独自の夏秋イチゴ品種‘なつおとめ’を育成し夏秋イチゴ栽培の普及拡大を図っている。

2010年、県北部の夏秋イチゴ栽培圃場において花器や果実に *Glomerella cingulata* によるイチゴ炭疽病（山本・福西，1970）が発生した（図-1～3）。栃木県のイチゴ促成栽培での本病の主な症状は斑点型病斑から枯死に至るものである。夏秋イチゴ栽培では、収穫期が夏季にあたるため圃場内の気温が高く、炭疽病が発生するとまん延しやすい。

本病の防除対策の基本は、病原菌を持ち込まないことと、圃場内で拡げないことである。持ち込まない対策としては健全苗の育成が、また、拡げない対策としては発病株の抜き取りや、水跳ねしない灌水方法（石川ら，1989）、予防的に化学薬剤を散布することが重要と考えられる。

これまで、促成栽培では、葉や株で発生した炭疽病に対する殺菌剤の防除効果を明らかにした事例はあるが



図-1 夏秋イチゴの花器・花梗における発病



図-2 夏秋イチゴの花器における発病



図-3 夏秋イチゴの果実における発病

（田口ら，2012；足立・渡辺，2014），花器および果実発病に対する効果の知見はない。

また、最も重要な防除対策は健全苗の育成である。このための苗に炭疽病をまん延させない耕種的防除法として、水跳ねを抑制する底面給水法（石川ら，1993）、ノンシャワー育苗法（越川ら，2003）、流水育苗ポット台（吉田ら，2012）および不織布を利用した株元灌水育苗法（三木ら，2006；米本ら，2008）等が報告されている。

本稿では、花器および果実に対する主要薬剤の効果と株元灌水育苗法（三木ら，2006；米本ら，2008）の本病

Generation and Control Measures of Strawberry Anthracnose Harvested Throughout the Summer and Autumn Seasons. By Makoto KOBAYASHI and Junichi TAKANO

（キーワード：夏秋イチゴ，炭疽病，株元灌水）